

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26381157

研究課題名(和文) 東アジア高等教育におけるグローバル人材像と国際教育展開

研究課題名(英文) Development and Expansion of International Education in East Asia

研究代表者

堀江 未来 (HORIE, Miki)

立命館大学・国際教育推進機構・教授

研究者番号：70377761

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、東アジア地域(日本、中国、韓国、台湾)の大学における国際教育展開を対象とし、大学の国際化において、真に学生の学びと成長に寄与する教育実践のあり方を考える上での知見を得ることを目指した。具体的には(1)政策動向・社会的文脈及び国際教育に関わる大学生の意識の比較分析(2)日中韓キャンパスアジア・プログラムにおける3カ国の学生の共修環境における学びの姿の探究(3)文化的背景の異なる学生同士の学びあい(多文化間共修)を促進するための理論的枠組みの検証と方法論の提案(4)英語を教授言語とする教育実践(EMI: English Medium Instruction)における課題分析を行った。

研究成果の概要(英文)：The general purpose of this research is to explore significant pedagogical perspectives which truly contribute students' personal growth in the scope of expansion of international education opportunities in East Asian higher education (Japan, China, Korea, and Taiwan). It covers the following specific studies; (1) comparative analysis of trends and social contexts of policy development/ implementation and students' views toward international education opportunities, (2) interpretive inquiry of students' experiences through a cross-cultural learning platform offered by the CAMPUS Asia program, (3) theoretical/conceptual analysis of cross-cultural peer learning and practical suggestion of pedagogical methodologies to promote personal growth through such learning environment, and (4) analysis of various challenges in EMI (English Medium Instruction) practices, which is one of the central themes of international education in East Asia.

研究分野：教育社会学

キーワード：国際教育 東アジア キャンパスアジア 多文化間共修 大学の国際化

1. 研究開始当初の背景

日本社会においては、2000年以降急速に「グローバル人材論」の重要性が増した。特に、政府や産業界からは、グローバル市場における競争の中で低下しつつある日本のプレゼンスを高めるべく、「主体的に物事を考え、多様な文化背景をもつ相手に自分の考えを伝え、多様な価値観や特性の差異を乗り越えて、相手の立場に立って互いを理解し、それぞれの強みを活用し、相乗効果を生み出して、新しい価値を生み出すことができる人材」(経済産業省 2010年)を、大学の国際教育の取り組みを通じて輩出することを期待されるようになった。文部科学省の各種事業を通じて、留学生受け入れ、日本人学生の派遣、ネットワーク形成、海外協定校との双方向交流によるプログラム開発など多様な形での国際化が推進されてきた。

国際化政策展開においては、海外の大学との双方向交流に重点が置かれるようになった。留学生 10万人計画のように、外国人留学生と日本人学生を分けて考える施策とは異なり、双方向交流を前提とした施策においては、日本人学生や留学生を含めた多文化環境を教育対象の前提としなければならない。例えば、日中韓キャンパスアジア事業では、3カ国の特定大学が連携し、お互いの学生を同じプラットフォームにのせて教育することを試みている。このようなプログラムの強みは、教室内外での一定期間の交流を通じて、異文化に起因する問題に共に取り組み、それぞれの異文化対応力を高めるだけでなく、多文化チームにおける自分の貢献のあり方、信頼関係の構築など、失敗体験も成功体験も含めて教育の資源として活用できる点にある。このように、海外協定校との双方向交流を前提とした国際教育プログラムをより意義深いものとするためには、そのような多文化環境を最大限に活用し、学生を教育的に導くことができる指導者が必要であると同時に、各学生の姿勢や資質、期待などについて適切に把握し、プログラム設計に反映させる必要がある。

2. 研究の目的

本研究は、東アジア地域(日本、中国、韓国、台湾)の高等教育機関における国際教育展開を対象とする。日本の高等教育における国際プログラム参加者については多様な出身国・地域が想定される中で、東アジア地域は、その地理的・歴史的要因から、日本に最も多くの留学生を送り出し続けている地域である。また、政治的・経済的な面においてさらに連携を強め、互惠関係を構築していくことが重要である。とりわけ日本人学生にとっては、グローバル社会で活躍する人材となるには、東アジア地域の社会文化を理解し、個人として信頼関係を構築できる資質を養

成することが必須である。

本研究では、東アジア地域におけるグローバル人材の捉え方と国際教育展開についてあきらかにすることをめざす。具体的には、各国の教育の国際化に関わる政策動向についてまとめた上で、個別の具体事例における人材育成のメカニズムについて検討するとともに、東アジアにおける共通の課題や人材育成モデルの提示を試みる。

3. 研究の方法

本研究は、今回の研究期間中において、以下の4つの側面から課題へのアプローチを試みた。

(1) 東アジア各国・地域における高等教育国際化に関わる政策動向の分析および個別大学におけるその解釈と実践事例を検証する。また、各国・地域の大学生に対し、国際教育に対する期待やグローバル人材像に関するアンケート調査を行い、比較する。

(2) 日中韓キャンパスアジア・プログラムの事例をとりあげ、双方向交流の学びのあり方についてプログラム分析をおこなうとともに、授業や取り組みの参与観察、学生への聞き取りを行い、異文化感受性発達理論及び Intercultural Development Inventory (IDI) を用いて分析する。

(3) 文化背景の異なる学生同士の学び合い環境(多文化間共修)のあり方に関する理論的枠組みを分析し、具体的な方法論の提案と検証を行う。

(4) 東アジアにおける国際教育実践の中で重要な役割を担っているEMI(English Medium Instruction、英語を教授言語とする教育実践)における、学生の学びの姿や実践上の課題をあきらかにするとともに、それに関わる教員の力量向上にむけた方法論を提案する。なお、各国・地域における国際教育の実践状況を調査する中で、新たな見地から具体的に掘り下げたい事柄として、上記の(2)(3)(4)を設定しなおした。

4. 研究成果

上記の4つの研究課題にしたがって、以下に現時点での成果をまとめる。なお、未発表の部分については、引き続き研究を続ける予定である。

(1) 東アジア各国・地域における大学の国際化政策の具体的な方向性については、共通点も多々あるものの、それぞれの社会的文脈の影響を大きく受けている。例えば、日本で2014年度から始まったスーパーグローバル大学創生事業においては、日本の高等教育の国際競争力強化を目指すことを前提に、それまでの政策(留学生10万人計画、世界展開力、グローバル人材育成事業等)のように外国人留学生や海外派遣学生といった限られた学生層をターゲットとするのではなく、あ

らゆる分野の学生を国際教育の対象とすること、そして、その10年間の実践を通して、教職員の国際教育に関わる力量向上を目指していることも特徴である。日本・韓国・台湾の大学生に対する国際教育に関する意識調査の結果(未発表)によると、韓国・台湾の大学生にとっての国際教育機会は、英語力の向上による履歴書の強化や、国外での就職を前提とした海外大学・大学院への進学などが想定されているのに対し、日本の大学生にとっては、異文化理解や視野の拡大、コミュニケーション力の強化などといったジェネリックスキルの獲得に目が向いていることがわかった。大学進学率の高さや卒業生の雇用状況の難しさにおいて、社会的背景を異にしていることがその要因であると推測される。

(2) 日中韓キャンパスアジアについて、日中韓三大学の学部学生が2年間に渡る3カ国での共同生活及び共修を通して成長する姿を分析した。IDIの比較調査(未発表)によれば、一般的な交換留学と比較して、キャンパスアジアで3カ国の共修プログラムに参加した学生は、異文化感受性の高まりにおいて優位な結果が現れた。その理由については、このプログラムがオールポート(1954)の提唱する「偏見を排除するための共修環境」の4つの条件(参加者が平等な立場であること、学びの目的を共有していること、協力を前提としていること、ルールや制度が明確であること)に合致していることが推測できる。また、教室や共同宿舎における参与観察から、言語文化の違いを乗り越えようとする意識の高さ、そういった困難さを学びの機会として捉える姿勢、学び合い・助け合いの関係構築のスキルが高いことなどがあらわれている。

(3) 多文化共修(文化背景の異なる学生同士の学び合い)のメカニズムとその方法論について、書籍としてまとめた。理論的枠組みの分析に加え、日本の各大学における取り組み事例を紹介・分析した。

(4) 東アジア地域における国際教育実践を検討する中で、EMI(英語を教授言語とした教育実践)の重要性に気づき、東アジア地域における状況を概観するとともに、日本における実践事例の調査を行った。東アジア地域においては、英語で教える課程が学部レベル・大学院レベルともに増加している。とりわけ韓国においては、大学の急速な変化の一部をEMIが担っており、さまざまな課題が指摘されている。教員の力量(英語力および多様な学生を対象とした教授力)及び育成のあり方、学生の力量(英語力及び多文化環境で学ぶ力)及び支援のあり方、プログラム設計と評価のあり方、大学改革との関連など、韓国で指摘されている問題については、規模の違いはあるものの、日本でも同様の指摘ができる。ある日本の大学における事例研究の結果、EMIのプログラム設定においては、英語

力に応じた段階的対応が有効であること、EMI環境であっても日本語を適宜使用することが学びを促進することなどが明らかとなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

Yukawa, E. & M. Horie. (2018). Local Students' Views of English-Medium Courses in a Japanese Context. 立命館高等教育研究 18. 査読あり. 93-109

Horie, M. (2014). Internationalization of Japanese Universities: Learning from the CAMPUS Asia Experience. International Higher Education, 78, 19-21. 査読あり

Horie, M. (2014). The Opportunities and Challenges of Intercultural Education for Asia Literacy. Ethos: The Journal of Social Education Victoria, 22/3, 20-23, 39. 査読なし

[学会発表](計11件)

湯川笑子・堀江未来(2017)「大学英語科目開講(EMI)における多言語使用」異文化間教育学会第38回大会

堀江未来(2017)「日本の大学における国際共修の取り組みとその展開: 異文化間教育の視点から」異文化間教育学会第38回大会公開シンポジウム・東北大学グローバルユニシアティブセミナー

Yukawa, E. & M. Horie. (2016). Students' Attitudes Towards English-Medium Courses: A Japanese Context. The 14th Asia TEFL International Conference

Horie, M. (2016). Top Global University Project: Japan's Internationalization Strategy. QS-APPLE Annual Conference

堀江未来(2015)「日中韓キャンパスアジアでの学びとその可能性: 国際教育学の視点から」キャンパスアジアプログラムリーダーズフォーラム

Horie, M. (2015). Internationalisation of Japanese Higher Education: The current government policy and institutional responses. Daiwa Anglo-Japanese Foundation Seminar Series

Horie, M. (2015). Development of Pedagogical Foundations for Intercultural Peer-Learning: As a Response to the Internationalization Policy Initiatives by the Japanese Government. Higher Education Research Association Conference

Horie, M. (2014). Internationalization

of Japanese Higher Education: Students' and Institutional Learning from CAMPUS Asia Experience. 2014 CAMPUS Asia Annual Symposium

Horie, M. (2104). The Japanese government's internationalization policies: Significant impacts on its higher education institutions. Center for Higher Education Internationalization, Università Cattolica del Sacro Cuore

Horie, M. & R. Yamamoto. (2014). Promoting intercultural learning through diverse classroom settings: A case of Japan-China-Korea. EAIE: European Association of International Education

Horie, M. (2014). Learning experiences of Chinese, Korean, and Japanese students in a multinational peer-learning environment: A case study of CAMPUS Asia program. Internationalization: Myths, Realities, Challenges, and Opportunities, Dublin Institute of Technology

〔図書〕(計3件)

Horie, M. (2017). Faculty Training for Non-Native Speakers of English at Japanese Universities: Effective English-Medium Teaching for a Culturally Diversified Student Population. In Bradford, A. & H. Brown (eds). English-Medium Instruction in Japanese Higher Education: Policy, Challenges and Outcomes. Multilingual Matters, 300 (207-224)

坂本利子・堀江未来・米澤由香子(編著)(2017)「多文化間共修:多様な文化背景をもつ大学生の学び合いを支援する」学文社.224(1-33)

Horie, M. (2015). Japan. In, H. de Wit, et al. (eds). Internationalisation of Higher Education. 326 (229-240)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

堀江 未来 (HORIE, Miki)
立命館大学・国際教育推進機構・教授
研究者番号: 7 0 3 7 7 7 6 1

研究者番号:

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号:

(4) 研究協力者

()